

学校が変われば地域が変わる 地域が変われば社会が変わる

学校と地域の協働実践セミナー公開講演 大阪市立大空小学校 前校長 木村 泰子 氏

平成29年度の「学校と地域の協働実践セミナー」は、「学校が変われば地域が変わる 地域が変われば社会が変わる」のテーマのもと、前半は映画「みんなの学校」の上映会、後半は大阪市立大空小学校前校長の木村 泰子 氏を講師に講演を行いました。

(※木村氏の講演を一部省略して記載しました。)

大空小学校の理念

地域の学校がその地域にあるかぎり永久に続くという理念、それは全ての子どもたちの学習権を保障する学校をつくること、それが大空小学校の理念です。学力向上が公立学校で果たさなければならない一番の優先順位だと言っているうちは、一部の子どもにしか適合しない公立学校になってしまうのではないのでしょうか。

学力の前に、子どもたちが学習する権利を周りの大人が確実に保障する必要があります。地域(公立)の子どもたちにとって、受験を目標とした学力が一番ではなく、夢を実現するために必要な学力をつけてあげることが大切です。

誰が困っている子なのか

見た目がいかに不良っぽい、1年生 B くんのお兄ちゃん。自分は中学校に登校していないにも関わらず、1年生の弟を毎日学校まで送ってきます。その姿を見て、小学校の校門の前で見守っている大人から「どうせなら、小学校にもう一度通ってみたら？」や「いろいろやってもらいたいことがあるからお手伝いしない？」などと声をかけられます。それを聞いたお兄ちゃんは「うっせー、くそばあ。」と捨て台詞を吐いて帰って行きました。そんなお兄ちゃんでは

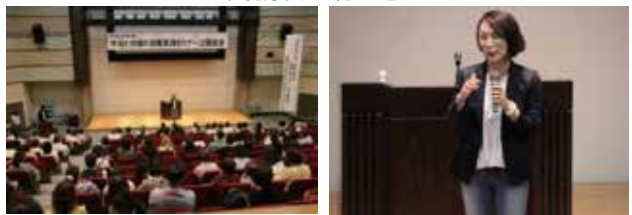
ありますが、毎日毎日弟を学校まで送ってきます。その姿を見た地域の人は、入れ替わり立ち替わり声をかけます。そのような地域の人々に対し、「うっせー、くそばあ。」と言いつつお兄ちゃんですが、そのうち黙って立ち去るようになりました。



そしてある日、「小学校で算数の勉強をしようか。」と声をかけると、「めんどくせえ。」と言いつつ、小学校の職員室で九九を勉強するようになりました。

このように、「おはよう。」と声をかけてもにらみ返す子は、どこの地域にも普通にいます。このような子どもたちこそ、実は様々な悩みや問題を抱えているのであって、逆に「おはよう。」と声をかけて、「おはよう。」と返す子はあんまり困っていないのではないのでしょうか。

「公開講演の様子」



大空小学校の空気

子どもたちの中には、他の地域の学校に通えなくても、大空小に来ると普通に通えるようになる子がいます。その子に聞いたところ、「大空小は空気が違う。」と言いました。「大空小の空気はどんなの？」と聞いたところ、「普通だけど居心地はいい。」とその子は答えました。それでは、大空小の空気はなぜ居心地がいいのか？それは教師だけで学校を作っているのではなく、地域全体で子どもたちを見守っているという雰囲気が学校にあり、その空気を子どもたちも感じています。学校の教師だけではできない部分を地域の人々が補ってくれて、子どもたちを支えています。

地域の方々が子どもたちの近くにいることで、大人が子どもたちの手本になってくれます。学校だけでは支えきれない子も地域の中にはいます。そういった子どもを地域全体で見守り、育てていくことが、これから大切なことなのではないでしょうか。

◆木村 泰子 氏 プロフィール

(大阪市立大空小学校 前校長)

「みんながつくる みんなの学校」

を合言葉に、全教職員のチーム力で「すべての子どもの学習権を保障する学校をつくる」ことに情熱を注ぐ。学校を外に開き、地域の人々の協力を経て学校運営にあたるほか、特別な支援を必要とされる子どもも同じ教室とともに学び、育ち合う教育を具現化した。

